

グローバル・サウス: もう一つの世界は可能だ

鈴木 頌

以下は北海道 AALA の鈴木頌副理事長が、2月22日に「北海道・医療9条の会」で行った講演録をご本人が大幅に加筆されたものです。(3月26日記)

はじめに

2003年2月15日 アメリカのイラク攻撃に反対する国際デモは、まさに地球規模のウェーブでした。

それは日付変更線に最も近い日本やアジア諸国から始まり、欧州各都市での空前の規模の集会・デモ行動へと広がりました。それはさらに大西洋を渡り、ニューヨークの国連本部前の集会へとつながりました。そしてサンフランシスコから太平洋を越えてメルボルンの大集会となって、幕を閉じました。

世界60カ国、600都市で1200万人が参加しました。(主な集会: 東京7千人、ダマスカス20万人、ベルリン50万人、ローマ300万人、パリ20万人、ロンドン150万人、スペイン各地計で400万人、アメリカではニューヨークで20万人、サンフランシスコで20万人、しんがりのメルボルン15万人)

明けて2004年、インドのムンバイでは世界社会主義フォーラムが開かれました。そこでは新自由主義と北が支配するグローバリゼーションへの抗議運動を超えて、『もう一つの世界』を構築するという課題が提起されました。

しかしそれから20年、世界はひたすら逆の方向に展開したように見えます。いま2つの熱い戦争と一つの冷たい戦争が同時進行するこの世界ですが、いま一度「もう一つの世界は可能だ」というスローガンを想起するときでもありません。それはどんな世界なのか。

合言葉は非核・非戦・非同盟。多国間の友好と公正にもとづく社会です。それを体現しようとしているのが「グローバル・サウス」の考えです。それはたんなる地理的枠組みではありません。北の一極支配に反対する歴史的流れを集約したものです。そこには北以外のすべて—東も西もふくまれます。それを垣間見てみようではありませんか。

目次

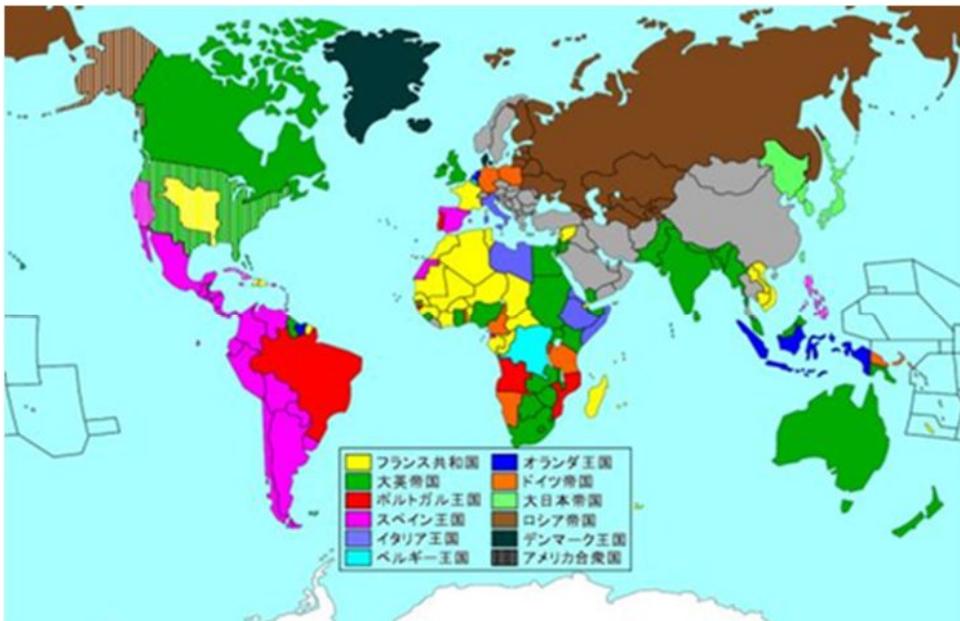
0 .	目次： もう一つの世界は可能だ
1 .	グローバル・サウスの歴史
2 .	成長したグローバル・サウス
3 .	グローバル・サウスの行動原則
4 .	アメリカ覇権主義とグローバルサウス
5 .	グローバルサウスとウクライナ戦争
6 .	BRICS_「南」を超えたグローバルサウス
図 1	国連総会決議一覧
図 2	森嶋通夫の非戦論_北海道新聞記事
補 1	グローバルサウスと非戦
補 2	米中関係と中国外交の変化

．グローバル・サウスの歴史

A 南イコール植民地の時代

1．大航海時代： ビザンツ帝国が滅びた後、ヨーロッパと東方世界をつなぐ道は途絶しました。東を目指して港を出たヨーロッパ人は、まず南に向か言いました。ヨーロッパ人にとっては外の世界は南とその先の世界でした。南の人は「人の顔をした生物」でした。北は南の国を襲い、人々を鎖につなぎ、その富を奪いました。

2．帝国主義の時代： やがてヨーロッパが世界中を征服すると、南だけでなく東も西もみな、その隷属世界になりました。北は北以外のすべての土地を奪い人々を貪りました。北の帝国は、分け前をめぐる血みどろになって争いました。2つの大戦の後に訪れた「北の平和」は、不安定な偽りの平和でした。貪り続けた野獣たちの束の間の安息に過ぎなかったのです。



B 新植民地主義の時代

1. 債務という新たなくびき

いっぽう南では、第二次大戦の後に新しい時代がやってきました。植民地のほとんどが欧州列強からの独立を果たしました。彼らは自らをグローバル・サウスと称し、旧支配国＝グローバル・ノースと対抗しようとしてきました。しかし財政基盤の弱い新興国にとって資金調達は厳しいものがありました。開発資金の調達に行きづまり、**通貨のワナ**、**債務のくびき**から逃れるのは困難を極めました。

東側諸国との連携や自立を試みて突出したいいくつかの国は、「左翼独裁」のレッテルを貼られ、北による過剰報復の対象となりました。

2. 第三世界構想の挫折

旧植民地は自らを東側でもなく西側でもない「**第三世界**」と位置づけ、北からの自立を図りました。どちらの軍事同盟にも加わらないという「非同盟」の考えも大きな勢力を占めました。

しかし東側（ソ連・東欧）の崩壊と「第二世界」の終焉によって、「第三世界」という考えの根拠も消滅してしまいます。

3. 「新自由主義を唯一の選択とする世界」の強制

こうして新自由主義（金融支配）を唯一の選択とするグローバリズム世界が出現しました。これに伴い南の世界は「新興国」、「発展途上国」、「最貧国」などと呼び分けられるようになりました。それは「北こそが文明の頂点」とし、南をグレード付けする思想です。そこでグローバリズム世界への対抗概念として**グローバル・サウス**（南の世界）という言葉が復活したのです。

4. 「グローバル・サウス」の新たな意味付け

南の世界は**共通した歴史**を持っています。それは 植民地支配 新植民地主義 ネオリベリズムと形を変えて続く痛みの歴史です。

南の世界は今も共通する痛みを抱えています。商品の世界市場が操作され、労働権や生活権が不当に差別され、資金の過剰流動性は安定した成長を不可能にし、通貨のワナや債務のくびきが絶えず、南を苦しめています。

「グローバル・サウス」は地理的枠組みというより、もっと広い意味合いを持っています。それは北に主権を奪われ、奉仕させられてきた国々という歴史的枠組みであり、階級的枠組みであるということです。

南の世界は、それらの痛みや苦しみにひたすら耐えてきただけではありません。民族自決権という最大の武器を手に、南側諸国の団結を武器に、国連や国際機関の場でそれらと闘ってきた「闘う主体」(Bargaining Power)の形成の歴史でもあります。そして地域共同体の形成という試行錯誤を繰り返しながら、「連帯する主体」の経験を積み上げてきました。

・成長したグローバル・サウス

グローバル・サウスという言葉が作られてから 50 年*を過ぎ、当時生まれたばかりの“南”は、その後飛躍的に発展し変容しました。しかし北優位のシステムも依然健在であり、干渉と収奪がむしろ強化されている側面もあります。このため北と南の対立は、ますます抜き差しのならないものになりつつあります。

*注： Carl Oglesby used the term "global south" in 1969, writing in Catholic journal Commonweal in a special issue on the Vietnam War. (Wikipedia)

かつて米国のライバルとみなされた西欧や日本は、いまや米国にシッポを振るだけの従属国に転落しました。その結果、今や国際対立のほとんどは、米中対決をふくめて南北対立の派生現象と見られるようになっていきます。

A. 「グローバル・サウス」はもはや無力な後進国ではない

北と南を世界政治経済における「中心と周縁の関係」と見るのは間違いです。かつて、南の経済は北の言うままに動かざるを得ないのだとする「従属経済論」が一世を風靡しました。それは実体経済の内在的發展を無視し、市場経済や金融支配の過重評価にもとづいて世界経済を説明しようとした。

しかし北と南の世界という構造は、なによりも歴史的加害国と被害国の関係です。政治的干渉や過剰な収奪がなければ、南はASEANのように自主的に発展する力を備えている。それは不均等発展ではなく“時差を持つ均等な発展*”です。

(*後発者利益や、通貨安、賃金安、コスト安、人口ボーナス、開発・創業リスク回避などはその典型である)

B. 「グローバル・サウス」の経済は北に拮抗しつつある

2050年までに、4大経済大国のうち3カ国がグローバル・サウスの国々になると予測されています。それは中国、インド、インドネシアです。米国は3位に転落します。(www.pwc.com)

すでにBRICS5カ国のGDP(購買力平価換算)は、G7諸国の総GDPを上回っています。グローバル・サウスは、「発展途上国」や「第三世界」の時代には決してなかった政治的・経済的力を持っており、今それを政治の世界でも発揮し始めました。

C. 「グローバル・サウス」という用語は地理的なものではなくなった

繰り返しますが、北は歴史的に加害国であり、南はその被害国です。北の支配が強まれば被害国の範囲は東に西に、地域的枠組みを超えて広がります。逆に南の抵抗力も地域を超えて影響を強めていきます。中国は地政学的にグローバル・サウスとは言えないが、南を支配する強国とはならず、南と肩を並べて進もうとしています。西から排除されたロシアも、南の方向を向き始めています。南の大国であるインドやブラジル、サウジでは脱亜入欧的な傾向も残存していますが、その方向に未来がないことはますます明らかです(中国の変化については補論を参照してください)

・グローバル・サウスの行動原則

この間に一部のグローバル・サウス諸国は自己の産業基盤を確立しましたが、金融・通貨・信用・情報の面では独自のシステムを持たず、北に対する衛星諸国に留まっていました。近年、これが3つの枠組みで組織され始めました。すなわち非同盟、非ドル化、多国間主義です。これらは欧米諸国と向き合うなかで形成されました。これは量的にとどまらないグローバル・サウスの質的深化です。

A. 非同盟運動

1990年の第一次イラク戦争以来、米国は国連を無視して勝手に「同盟」を組織し武力干渉を続けてきました。とりわけ中東は全域にわたり破壊の対象となりました。こうした歴史を踏まえて、非同盟は一般的に同盟ではなく、“対米従属型軍事同盟”に反対することに集約されます。それは核大国の傘のもとに入らないという非核運動でもあります。

もう一つの流れが旧東欧諸国のNATOへの組み込みです。その初期段階では、ユーゴスラビアという国が粉々に打ち砕かれ、国民が互いに殺し合いをさせられました。この国が非同盟運動の創設者、南の代表であったことを忘れてはなりません。「ソ連・東欧からの防衛」を謳ったNATOが、本来の任務を終えた後も存続し、ユーゴを最初の標的としたことは、その本質を知る上で重要です。

軍事同盟は誰が誰と組もうと、それがいかなる美辞麗句に包まれようと、認めることはできない。非同盟運動は“反軍事同盟運動”でなければなりません。

B. 非ドル化

リーマンショックから欧州金融危機と進むなかで、未曾有のドル乱発、金利操作、減税競争が行われました。先進国における貧富の差は、最後は南北格差にしわよせされます。グローバル・サウスも大きな被害を被りました。こうしたなかでドル支配（ブレトン・ウッズ体制）を打破することが至上課題になった

のです。

C. 多国間主義

社会主義体制が崩壊するなかで、非欧米世界では一時小覇権主義が表面化しましたが、それは個別に潰されました。多極化論から多国間民主主義への転換が急速に進行しました。いま南の大多数の国では“覇権を争わないことが原則”になっています。

域内共同市場の形成から始まり、域内大国と小国が手を結んで公平に進むための「ルール形成」が進みました。個別交渉を排し、国連や国際法にもとづく公正・公平を尊重する精神は、多国間主義と呼ばれ、グローバル・サウスの最大の準則となっています。

D. 多国間主義の根源、法治主義

これはついで。

多国間主義は国際関係のルールですが、その根源としての「法にもとづくガバナンス」（法治主義）は南の諸国の国内問題でもあります。法治主義には権力者・官僚の腐敗を許さない刑法、行政法体系と、弱者たるゆえに抑圧されず、尊重される法的対応が求められます。

この法治主義は北の大国の「価値観外交」への鋭い切っ先ともなります。カラー革命を僭称する騒擾行動、信用・為替市場への乱暴な介入など「自由」の名のもとにおける干渉や破壊工作、「人権」の名のもとにおける激しい情報操作…。これらと対抗するためにも厳格な法整備が急速に求められています。

・アメリカ覇権主義とグローバル・サウス

A. 唯一の超大国 アメリカ

社会主義体制の崩壊によりアメリカは世界一の超大国となりました。それはまず何よりも軍事的に無敵という意味です。経済的には決してそうではありません。むしろ腐朽し空洞化した老大国です。だからつねにライバルになりそうな相手を見つけては叩き潰し、相手に恐怖感を与えることで権力の座を保ってきました。

1990年代は比較的小さな国を個別に撃破するやり方でしたが、今世紀に入ってからには特に中東で、比較的規模の大きい国に狙いを定めて正規戦で殲滅する方向に切り替わりました。そしてこの十年はロシア、中国といった最大の仮想敵国を正面から打ち破る戦略へ転向しています。しかも二正面作戦をも辞さないきわめて危険なやり方です。

B. アメリカの覇権を支えるもの

このむき出しの覇権主義は、軍事脅迫だけではなく、貿易市場からの排除、圧倒的なドルの力を背景にした金融制裁の三本柱からなります。これに報道機関を通じた「独裁」攻撃、陰謀組織による不安定化工作が彩りを添えます。いずれも国際法を無視した独断専行で、今や北のどの国も口出しできなくなりました。結果として国連の権威は地に墜ち、南の発言力は失われてしまいました。

C. 南は地域連携主義と多国間主義で対抗

覇権主義に対する南の回答が地域連携主義と多国間主義です。南の団結の土台となる地域共同市場（ASEAN、上海協力機構、南米共同市場）はこの間に飛躍的に発展しました。最初は実体経済の連携でしたが、最近では現地通貨建て貿易、国境をまたがるインフラ整備まで進みつつあります。

大事なことは、地域連携は量的問題にとどまらないことです。それは政治的均質性を求め、国連・国際機関の民主主義ルールを共通の前提としています。域内・域外を問わず、国際法無視の覇権主義は排除・敬遠されます。これらは非同盟運動の礎となった1956年のバンドン会議に端を発することから、「バンドン精神」と呼ばれます。

多国間主義について特筆すべきは、中国の国際的立場の変化です。中国は21世紀に入ってからの高度成長を受け、一時は強国化論が主流になりました。しかし欧米からの制裁攻撃を受け、ウクライナ戦争から学ぶなかで、多国間主義の原点に復帰しました。この変化を抜きにグローバル・サウスは語れません。

・グローバル・サウスとウクライナ戦争

A. ウクライナ戦争を契機とする欧米諸国の蹉跌

ウクライナ戦争そのものはここでは扱いません。ただ現代史の上でウクライナ戦争は大きな意味を持っています。この戦争は南北を分ける大きな分岐点になっています。南の世界はこの戦争をきっかけにして、北の世界のいうままになるのをやめました。いっぽう北の世界は、この戦争をきっかけにしてアメリカのいうままになるようになりました。

ロシアの武力侵攻は許せない行為です。しかし欧米諸国は停戦を拒否し、南には事実上のNATO支持を求めています。武力対決は2年たった今も続き、解決の展望は見えません。

編注：「イスタンブール合意」は、4月4日づけの日経新聞によれば次の柱からなっています。キーウ周辺におけるロシア軍の活動の大幅縮小、ウクライナの「中立化」（NATO非加入）、クリミア半島の主権に関する継続協議。

B. グローバルサウスの離反

戦争の経過を見つめていた南側諸国は一刻も早い停戦を求めるようになりまし
た。国連決議を見ればわかるように停戦を求める決議には賛成するが、ロシア
を糾弾する決議には棄権する。そのわけは「糾弾しても停戦は来ないどころ
か、かえって遠ざかってしまう」というのが南の素直な思いだからです。

北の独りよがりが高圧的な態度には植民地支配者の面影が残っています。北の
メディアは、南の意見をまったく報道せず、「それは親ロシアの主張だ」と烙印
を押すばかりです。（図2 国連総会決議一覧をご参照ください）

下図を見ればわかるように結局欧米諸国の押し付けた悪循環の最後は、南側諸国がかぶることになるのです。



国連のグローバル危機対応グループによるグラフ

C. ロシアが生き残った理由

ロシアは自国への強い危機感がありました。だから NATO 諸国による制裁を覚悟してでも戦争に踏み切りました。予想通り、制裁・禁輸攻撃は凄まじいものでした。

まず海外の預金は凍結され、事実上没収されました。原油・LPG さらに農産物と肥料の貿易も制限されました。食料・エネルギーの禁輸は、それに頼っていた南の人々を直撃しました。

南の人々がその状況を甘受したわけではありません。トルコ、イラン、中央アジア、インド、中国など多くの転売ルートが開かれ、ドルを介さない交易が始まりました。その際有力な信用を提供したのが人民元でした。

例えば昨年度ロシアの小麦輸出はなんと過去最高でしたが、その際有力な信用を提供したのが人民元でした。これらの動きは連動し、北の影響を受けない南南ルートの開拓に繋がりました。ロシアが欧米の包囲網のなかで経済を維持できているのは、南との物心両面に渡る接触が続いたためです。

(ロシア生き残りの詳細については補論「ロシア生き残りとグローバル・サウス」を参照されたい)

D. 持続可能なプラットフォームへの発展

これらのコネクションが持続可能なシステムとなるためには、3つの課題があります。

すなわち、エネルギー・食料供給と物流の管理、グローバルな金融・開発システムの管理、そして平和と安全保障のための「開かれた制度」です。なかでも の課題は目下きわめて切実な課題となっています。

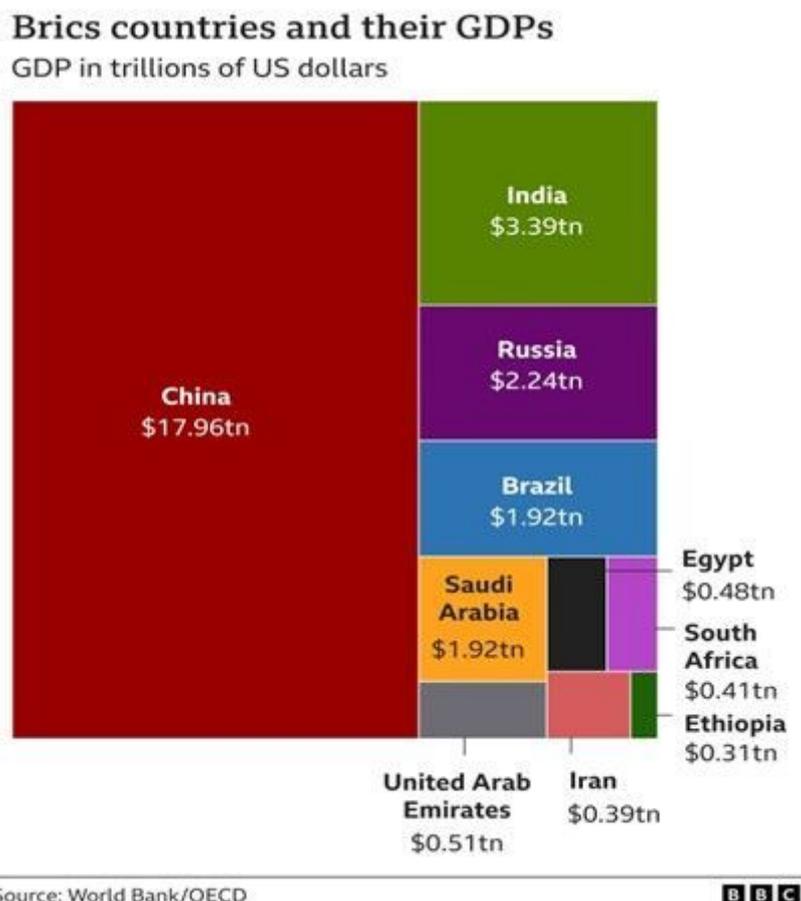
BRICSはその典型的な試みです。異質な君主制国家や宗教性国家が加入し、他の国がこれを歓迎した理由もそこにあります。

. BRICS: 「南」を超えたグローバルサウス

A. 注目されたのはウクライナ開戦の後

BRICS そのものはすでに今世紀初頭に立ち上げられています。決して政治的ニュアンスの強いグループではないし、団結心が強いグループとも言えません。そんな組織として未熟な国家連合が、注目をあびるようになった

のは最近のことです。流れとしてはこうなります。



21 世紀に入って、中国はユーラシア大陸の東と西を結ぶルートとして「一帯一路」(Belt and Road) を積み上げてきました。そのターゲットは欧州諸国でした。それが米中経済摩擦のあおりを受けて不調になりました。ウクライナ戦争はこの交易ルートに壊滅的な影響をもたらしました。同じ頃ロシアはトルコからエジプト、イランから UAE への輸送路を開拓し、この資源供給力を一帯一路に乗せることで、太い物流が形成されました。

それだけでなく、人民元に現地通貨を組み合わせた信用決済システムが出来つつあります。そして国家レベルの支えとして、北の支配から独立した“中大国”による連合 BRICS の役割が急浮上したのです。

BRICS が注目されたのは、直接ウクライナ戦争からではありません。23 年 3 月のイランとサウジとの歴史的和解に続いて、8 月の BRICS 首脳会議で参加国が一気に 5 カ国も増えたことからです。しかもそのうちの 4 国は、世界の火薬庫ともいべき中東の大国イラン、サウジ、UAE , エジプトであることからです。これまでの 20 年間、戦争に明け暮れた中東で、アメリカ軍と米ドルの支配から離れ、自立を願う国家が集団発生するのは驚きです。アメリカにとっては驚きを通り越して悪夢でしょう。



2023年8月、南アフリカで開かれた首脳会議。前列左4人目からブラジルのルーラ大統領、中国の習近平国家主席、南アフリカのラマポーザ大統領、インドのモディ首相、ロシアのラブロフ外相。イランやサウジアラビアの高官、インドネシアのジョコ大統領（前列右端）、BRICS 銀行総裁のルセフ元ブラジル大統領（前列右から2番目） [IDE スクエア](#)より

B. これまでの共同体とは次元が異なるもの

これまでの南の共同体は地域が単位でした。これに対し BRICS は文字通りグローバルであること。これが第一の違いです。第二に、これまでは個別の国内市場を相互に開放するのが主要な目標でしたが、BRICS は資源・食料から流通、金融、開発までを含め包括的なパートナーシップとなっていることです。

第三に、参加希望国が門前列をなしていることにも表されているように、文化・価値観をふくめ緩やかでインクルーシブなことです。第四に、中国やロシアといった域内大国が築いてきた交易関係が基礎となっている分、土台に具体的で実務的な諸関係が座っています。つまり経済的共同体として成熟した関係となっていることです。

C. 魅力的だが不安定 南の枠内の試みの一つとして長期的に評価するべき

国際司法裁判所にジェノサイド条約違反を提訴した南アには、BRICS 議長としての重みがありました。グローバル・サウスの顔としての BRICS には野球のオールスター・チームのような華やかさがあります。

しかしオールスターチームが実戦に強いとは限りません。しかし通貨危機を仕掛けられたアルゼンチンが親米派に乗っ取られるなど、新興組織ならではの不安定要素を持っています。サウジの行方も不透明です。そもそも1年前までブラジルの大統領はボルソナロでしたから、このときに空中分解していたとしてもまったく不思議はありません。

BRICS は今のところグローバル・サウスのデッサンに過ぎません。しっかり根の生えた大木になるためには、従来型の南の諸国、諸組織による支えが絶対に必要です。

(以上)